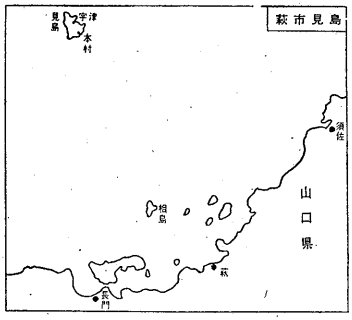
萩市見島方言の語アクセント

岡野信子

はじめに

(1) 見島

見島は萩市の北々西約四〇キロメートルの沖合に浮かぶ孤島である。現在は萩市に編入されているが、以前は阿武郡に属していた。萩の浜崎港から、定期船で約三時間の距離であるが、海はときおり荒れて島を遠くする。面積七、八二六平方キロメートルの島の大部分は山地で、集落は南部の本村と東北部の宇津（うつ）の二つである。宇津（人口五四五人）は本村から約一里の山道を隔てた所にある、半農半漁の集落である。近世初期、本村の枝村として集落が形成されたが、その後、本村とはほとんど交渉がなかったという。かつては「北前船」の寄港地として栄えたところでもある。南部の本村は一つづきの集落であるが、〃村〃（一、〇一八人）と〃浦〃（七七二人）とでは、その生活状態が異なっている。〃村〃は農業地区で、見島の集落が最初に形成された所でもある。〃浦〃は漁業区で、幕末ごろは交通運輸の仕事もすべてこの地区で行なった。以前から、三地区の青少年は同じ学校に通い、よく知合っているが、地区間の通婚は希である。



(2) 見島方言　語アクセント調査の目的

昭和四五年三月、初めて見島を訪れた私は、「フネガ　ツイタ。」（舟が着いた。）「ホガ　デタ。」（穂が出た。）という文アクセントに驚いた。よく聞けば、文法面にも、語詞面にも、長門方言色が濃かったが、この文アクセントによって、異域のことばのように感じられることが度々あった。見島の言語生活をそのままに把握したいと願う私は、語アクセントの調査から始めようと夏を待った。この小報告は、四五年八月二日から一三日の間に得た資料によっている。

(3) 調査対象者

〃村〃、〃浦〃、〃宇津〃の三地区それぞれに、小学六年生、中学三年生、二五歳前後、四五歳前後、六五歳前後の男・女一名、計三〇名を目標とした。じっさいには、四六人の方にお願いしている。両親の代からの土地人で、外住歴が一年を越えない方々であるが、〃村〃の二〇代女性だけは、中学卒業後三ケ年を下関で過しておられる。なお、長門方言一般の語アクセント体系との比較のため、萩市玉江（たまえ）の老人男・女お一人ずつに同じ語でお願いした。

(4) 調査語と調査順序

一、二、三音節名詞、および動詞、形容詞は「伯方島語アクセント調査」（昭和四二年八月、藤原与一博士のご指導のもとに行なわれた。）におけるものを拝借した。四、五音節名詞は、平山輝男博士の『全日本アクセントの諸相』（昭和一八年）から選ばせていただいた。調査語の語順は、音節数・類別・語頭音節と第二音節の音韻などを考慮して定め、常にその語順に従った。

(5) 資料整理について

見島の語アクセントは型のゆれていることが多かった。型を云云する際には、一〇人中、七人以上が示す型をその語のアクセント型と考えた。同一の型を示す人数が六人以下の時は、型のゆれている語と扱っている。なお、以下の記述にはアクセント記号を次のように用いた。

平板型　○▽　　○○　　尾高型　○○
中高型　○○|○　　頭高型　○|○

I 名詞のアクセント

1 一音節名詞

調査語　柄・蚊・子・血・戸・帆・実・身（第一類）　名・葉・日・藻・矢（第二類）　絵・尾・木・粉・酢・田・手・菜・荷・根・野・火・穂・目・湯

一音節名詞には平板型と頭高型の二型がある。第一類・第二類の語は頭高型で三地区とも安定しているが、第三類の語は左表のように二つの型に分かれる。

	宇津	村（本村）	浦（本村）
平板型 ○▽	粉・酢・田・手・根・火・穂・目・湯	粉・酢・田・菜・根・火・穂・目・湯	菜・根・湯
頭高型 ○|▽	絵・尾・荷・野	尾・荷・野	絵・尾・木・手・荷・野・穂・目
○▽型と○|▽とにゆれている語	木・菜	絵・木・手	粉・酢・田・火

型のゆれている語は、〃宇津〃と〃村〃とでは、老壮年層が○▽、青少年層が○▽と分れている。〃浦〃では全年層を通じてゆれている。この状態は、かつては一、二類は頭高型、三類は平板型であったが、今や頭高一型になろうとする勢いを見せているのであろう。その勢いは〃浦〃にもっとも強い。一音節語のアクセント体系を、萩市玉江方言のそれと比較してみると下表のとおりである。見島アクセントは、東京式の玉江アクセントと型の種類は同じであるが、その所属語はほぼ逆である。一音節語は、かつては京阪式と東京式の中間的なアクセント体系であったが、今日、一型化の様相を見せていると言えよう。

	一類	二類	三類
見島	○▽		○▽（○▽も）
萩市玉江	○▽		○▽

2　二音節名詞

左の表は二音節名詞のアクセント体系とその所属語を示したものである。調査語は全員が同じ型に答えたものから順に並べた。語の右肩に×を付けたのは二人または三人が別の型に答えた語である。アメ（飴）アメガ、オケ（桶）オケガなどは、ごく少数の語について、一人か二人が示したに過ぎないので、この表にはあらわしていない。

	宇津	村（本村）	浦（本村）
平板型 ○○	一類　梅・桃・桐・霧・飴×・雉×	桃・飴×・梅×・桐×・霧×	桃・桐・霧・梅・雉・飴×
	二類　弦×	蟬×	蟬
	四類　笠・息・臼・帯・錐・隅・箸・針・麦・稲・肩・今朝・種・中・舟・海・松・糸×・鎌×・今日※1	肩・針・麦・稲・鎌・種・舟・臼・海・帯・錐・糸×・笠・中×・息×・松×・隅×・箸×	笠・臼・帯・針・麦・稲×・肩×・鎌×・種×・息×・海×・箸×・松×
	五類　桶・黍・鶴・露・雨・蔭・窓・声×・秋×・春×	露・桶・鶴・雨×・蔭×・蜘蛛・声×・窓×・黍×	桶・蔭×・鶴×・露×・雨×・黍×
	三七語	三三語	二六語

	宇津	村（本村）	浦（本村）
尾高型○○」			
一類	枝・顔・金（かね）・口・首・腰・鳥・水・道・虫・風・酒・竹・箱・鼻・庭・牛×・壁×・此（これ）×・釜×	壁・釜・酒・竹・箱・鼻・庭・牛・口・首・腰・鳥・水・道・虫・枝・顔・金・此・端×・風×	顔・金・此・酒・竹・箱・牛・口・鳥・端・虫・風・鼻・庭・柿・首・腰・水・道・壁×・枝×
二類	川・下（しも）・旗・人（ひと）・胸・旅・夏・橋・肘・昼・冬・町・鞍×・型×	川・下・旗・人・胸・旅・弦・夏・橋・肘・昼・冬・町	歌・音・川・鞍・下・旗・人・胸・村・石・垣・紙・旅・夏・肘・昼・冬・町・雪・型・寺・橋
三類	池・馬・草・花・犬・月・腕・靴×	馬・草・花・犬・月・島	池・色・腕・馬・皮・草・事・島・玉・花・腹・山・足・犬・鬼・髪・炭・月・年・波・蚕・倉・耳・糠×
四類	父×		鑿・上（かみ）・父×
	四三語	四〇語	七〇語

	宇津	村（本村）	浦（本村）
頭高型 ○\○ 一類	柿・蟹×・蜂×	柿・蜂・蟹×	蜂・蟹
頭高型 ○\○ 二類	歌×・垣×・石×・紙×・雪×	石×	
頭高型 ○\○ 三類	貝・鯛・鬼・栗・蚤・雲×・山×・足×・炭×・波×・耳×・泡×・腹×・髪×・年×・糠×	貝・栗・耳・腹・皮×・炭×・糠×・雲×・山×・足×・鬼×・蚤×	貝・栗
頭高型 ○\○ 四類	下駄×・空×	空・下駄	空・今日・今朝×・中×・舟×・隅×
頭高型 ○\○ 五類	鯉・猿・蛇・鮒・聟・琴×・井戸×・鮎	井戸・鮒・鮎・鯉・猿・蛇・琴・聟	井戸・琴・聟・鯉・猿・蜘蛛・鮒・蛇・春×
	三四語	二六語	一九語
○○」型と○○型に揺れている語 二類	音・寺・村	歌・音・型・鞍・寺・村・垣・紙・雪	
○○」型と○○型に揺れている語 三類	色・皮・倉・事・島・玉・神	泡・池・色・腕・倉・事・玉・神・髪・靴・鯛・年・波	神・靴・鯛
○○」型と○○型に揺れている語 四類		父	
	一〇語	二三語	三語

	宇津	村（本村）	浦（本村）
○○型と○○型に揺れている語	（一類）端 （二類）蟬 二語	○語	（一類）釜・（二類）弦 （三類）泡・（四類）粟・糸 五語
○○型と○○型に揺れている語	四類 五類 ○語	今日・今朝 秋・春 四語	声・窓・秋・鮎 四語
○○型と○○型に揺れている語	四類　粟・上・鑿 五類　蜘蛛 四語	一類　雉 四類　粟・上・鑿 四語	三類　雲 四類　下駄・錐 三語

右の表から次のことが読み取れる。

〈ア〉一類の語は三地区ともに○○型が主勢力である。

〈イ〉二類の語は〝浦〟では○○型に安定しているが、〝宇津〟と〝村〟とでは、○○型と○○型にゆれている語も多い。表示してはいないが、○○に言うことは老壮年層に多いので、見島ではこの方が二類の語の古い型であろう。

〈ウ〉三類の語は〝浦〟では、○○型である。〝宇津〟と〝村〟とでは、○○型が主であるが、老壮年層は○○型、青少年層は○○型にゆれている語も多い。〝村〟の女子中学生は、「おばあさんと小さい子はオニ、ウデと言って私と反対。」といった説明をたびたび加えた。○○型が古いのであろう。

〈エ〉三地区ともに四類の語は○○型であるが、五類の語は○○型と○○型が相半ばしている。五類の語が○○型をとることは〝浦〟でやや多く、また三地区ともに青少年層にその傾向が強いことから、古くは四類、五類ともに○○型ではなかったかと推察される。

〈オ〉 左表は見島アクセントの代表として〝村〟アクセントを取上げて、萩市玉江のそれと比較したものである。両方言は三つのアクセント型を持つ点では同じであるが、その所属語はかなり異っている。

	一類	二類	三類	四類	五類
見島〝村〟	○○」	○○」(○|○)	○|○	○○|	○|○○
萩市玉江	○○|	○○」	○○」	○|○	○|○

3 三音節名詞

一、二音節名詞のアクセントでは、〝宇津〟と〝村〟に古態の残存、〝浦〟に新化という対比関係が認められたが、三音節以上の語では三地区の状態が近似している。以下、三、四、五音節名詞では代表として〝村〟地区のアクセントを取上げている。

(1) 尾高型（○○○」）の語

間・蜥蜴・夕（ゆうべ）（以上二類）頭（あたま）・軍・恨・思（おもい）・女・刀・暦・宝・剣・光（以上四類）苺・後・鯨・薬・便・盥（以上七類）兎・鰻・烏・狐・雀・背中・高さ・鼠・誠・操・蓬（以上六類）筏・錨・鰯・己・飾・霞・形・着物・轡・煙・氷※1・小山・衣・魚・鼻・印・机・隣・初・鼻血・庇・額・羊・都・柳（以上一類）　※1 ○|○○　五五語

(2) 中高型（○|○○）の語

小豆・釣瓶・男・東・小麦（以上二類）表・鏡・敵・言葉・袴・鋏・袋・蓆（以上四類）栄螺・力・二十歳（以上三類）五つ・命・鰈（かれい）・心・姿・涙・火箸・眼（以上五類）　二四語

(3) 頭高型（|○○○）の語

鶉（四類）胡瓜※2（五類）蚕・兜・病（以上七類）雲雀（六類）　※2 |○○○　六語

(4) ゆれの著しい語

毛抜・二つ・二人（以上二類）扇・堺・仏（以上四類）黄金・岬（以上三類）錦（五類）仔牛（一類）以上は○○○」と○|○○　朝日（五類）（アサヒとアサヒ）　一一語

型の種類は東京式の玉江方言より一型少なくなっている。現在は三型あるが、尾高型が調査語数の半ばを超えていて、やがてこの一型になるかと予想される。一方、アズキ、オモテのように二類、四類に中高型の語が多いことも、玉江方言に対して異色を見せている。「全国アクセント比較表」（『全国アクセント辞典』）を見ると、北陸の富山でも、二、四類に中高型の語が多い。

4　四音節名詞

(1)　中二高型（○○|○○）の語

アフリカ・行燈※1・転寝（うたたね）・遠足※1・お日様・塊・軽業（かるわざ）・嘴・逆様（さかさま）・武士（さむらい）・しきたり・小説※1・責任・七夕・釣鐘・漬物・停車馬※1・人蔘※1・配達※1・春雨・広島・舷（ふなばた）・呪い（まじない）・悪者・翌日（あくるひ）・金持・極楽・正月※1・贅沢・綱引・毒消し・長生き・麦蒔・欲張・我儘※1・愛敬※1・案内・傘・信心※1・橙※1・名人※1・嫂・生花（いけばな）・牡丹餅・悪口※1・煎餅　※1　○○|○○　四六語

(2)　中一高型（○○|○○）の語

甘酒・紫陽花※2・学校※2・かんざし・熊本※2・相談※2・大根※2・手拭い・日の丸・猪・先生※2・朝顔・九つ・建物※2・挨拶※2・小遣・素人※2・親切※2・中学※2・富士山　※2　○○|○○　二〇語

(3)　頭高型（○|○○○）の語

命日　一語

(4)　ゆれの著しい語

生物（イキモノとイキモノ）・本人（ホンニンとホンニン）・安産（アンザンとアンザン）　三語

四音節名詞のアクセントは三型で、玉江方言より二型少ない。中二高型の語が調査語数の⅔を占めている。一方、頭高型はゆれの著しいものを加えてもわずかに二語に過ぎない。

5　五音節名詞

(1)　中三高型（○○|○○○）の語

駐在所※1・生薬屋（きぐすりや）　※1　○○|○○○　二語

(2)　中二高型（○○|○○○）の語

間柄・赤茶色・開放し（あけはな）・言伝え※2・生別れ・幼顔・思切り・綺麗好き・薩摩芋・水溜り・土産物・命懸け・嬉し泣き・困り者※2・暢気者※2・判じ物・独り者・呻声（うめきごえ）・宝物（たからもの）・俄雨・単衣物（ひとえもの）・渡し舟・朝御飯・後始末・油虫・生辞引・植木鉢・鏡餅・黒煙・硯箱・生卵・針仕事・花曇り・麦畑・洗張り・閏年（うるうどし）・器量好し・苦労人・一摑み・木綿糸・貰い乳・雇い人（にん）・影法師・肩車・高島田・夜中（よるよなか）・分け隔て　※2　○○|○○　四七語

(3)　中一高型（○○|○○○）の語

台所※3・下関・好き嫌い・火の車　※3　○○|○○○　四語

(4)　ゆれの著しい語

赤蜻蛉・海坊主（○○|○○○と○○|○○○）　二語

三型を有しているとはいえ、中二高型一型と言ってもよい実態である。

1　二音節動詞

	宇津	村（本村）	浦（本村）
一類	咲く×・散る×・言う× 為る 四語	咲く×・散る× 着る× 三語	売る・置く・聞く・散る・泣く・巻く・焼く・言う・行く・割る・乗る・振る・買う×・突く×・鳴る× 着る・為る・似る・寝る× 一九語
二類	切る・蒔く・合う×・打つ×・掻く×・食う×・立つ×・取る×・飲む×・読む×・書く×・裂く×・磨る×・付く×・降る× 出る・見る 一七語	磨る・吹く・蒔く・打つ×・切る×・裂く×・付く×・飲む×・書く×・掻く× 見る 一四語	飼う・付く・成る・切る×・裂く×・吹く× 六語

尾高型　○○」

	宇津	村（本村）	浦（本村）
頭高型 ○|○ 一類	買う・行く×・売る・欠く×・聞く×・泣く×・乗る×・寝る×・着る 九語	置く×・買う× 二語	欠く× 一語
頭高型 ○|○ 二類	飼う× 一語	○語	合う×・読む×・出る× 三語
○○」型と○○|型にゆれている語 一類	置く・突く・鳴る・振る・巻く・焼く・割る・似る 八語	売る・欠く・聞く・突く・泣く・鳴る・乗る・振る・巻く・焼く・言う・行く・割る・為る・似る・寝る 一六語	咲く 一語
○○」型と○○|型にゆれている語 二類	成る・吹く・来る 三語	合う・飼う・食う・立つ・取る・来る・出る 七語	打つ・書く・掻く・食う・磨る・立つ・取る・飲む・降る・蒔く・来る・見る 一二語

右の表は次のように読むことが出来よう。かつては三地区ともに、一類は○○型、二類は○○|型であった。それは玉江方言とは逆で、かえって北陸の富山などと近いようである。その後、〃村〃と〃宇津〃とでは一類中の一部の語が○○|型に変化した。一方、〃浦〃では一類の語のほとんど全部と、二類中の一部の語とに変化が起って現在の状態となった。ただし、基本形のアクセントでは他の二地区とかなり異っている〃浦〃の場合も、活用形調査ではさほどの違いはなかった。〃宇津〃と〃村〃とでは、左に示すAB二種の活用形アクセントのうち、A式がさかんで、B式はごく希にしか聞けない。〃浦〃ではB式も行なわれているが、どちらかといえばむしろA式の方が優勢である。語が運用される場合には、語意識に立って基本形を言う時よりも、自然に旧を守っているのであろうか。

	一類	二類
〃村〃と〃宇津〃	○○| ↙ ○○| ○○|	○○| ― ○○|
〃浦〃	○○| → ○○|	○○| ↙ ○○| ○○

	一類 A	一類 B	二類 A	二類 B
置ク	○○|	○○|	○○|
オイタ	○○|	○○|	○○|
オカン	○○|	○○|	○○|
オクもの	○○|	○○|	○○|
オケ	○○|	○○|	○○|
オクナ	○○|	○○|	○○|
オコー	○○|	○○|	○○|

	一類 A	一類 B	二類 A	二類 B
スルセル	○○|	○○|	○○|
シタセタ	○○|	○○|	○○|
セン	○○|	○○|	○○|
スルものセル	○○|	○○|	○○|
セー	○○|	○○|	○○|
スルナセルナ	○○|	○○|	○○|
ショー	○○|	○○|	○○|

	一類 A	一類 B	二類 A	二類 B
書ク	○○|	○○|	○○|
カイタ	○○|	○○|	○○|
カカン	○○|	○○|	○○|
カクもの	○○|	○○|	○○|
カケ	○○|	○○|	○○|
カクナ	○○|	○○|	○○|
カコー	○○|	○○|	○○|

	二類 A	二類 B
出ル	○○|	○○|
デタ	○○|	○○|
デン	○○|	○○|
デルもの	○○|	○○|
デー	○○|	○○|
デルナ	○○|	○○|
デロー	○○|	○○|

2 三音節動詞

上る・遊ぶ・当る・洗う・歌う・踊る・飾る・語る・通う・変る・刻む・殺す・探す・記す・進む・畳む・違う・並ぶ・登る・運ぶ・拾う・渡る・開ける・上げる・植える・欠ける・消える・捨てる・染める・潰ける・腫れる・負ける・曲げる・焼ける・割れる（以上第一類）余る・痛む・祈る・動く・移る・恨む・起す・落す・思う・帰る・崩す

曇る・下がる・照らす・頼む・作る・通る・習う・光る守る・分かる・生きる・起きる・落ちる・覚める・過ぎる・建てる・付ける・溶ける・投げる・逃げる・延びる・晴れる・見える・分ける（以上第二類）歩く・隠す・はいる・参る（以上第三類）

三音節動詞はすべて中高型（○○○）である。もっとも、「通る」・「はいる」・「参る」は○○○型であるが、これは第二音節が長音またはイ母音であるために起った現象であるから、○○○型として扱った。活用形のアクセントも、ヒテタ（捨てた）・ヒテン・ヒテルモノ・ヒテー・ヒテルナ・ヒテロー式に安定している。否定形が四音節の場合は、イゴカン（動かん）、サガサンのように中二高型となる。

3　四音節動詞

嘲（あざけ）る・憐む・窺（うかが）う・悲しむ・従う・疑う・養う・貪る・与える・重ねる・唱える・並べる・始める・亡びる（以上第一類）集まる・怪しむ・表わす・偽る・驚く・喜ぶ・集める・諫める・数える・答える・調べる・流れる・助ける・離れる・隔てる・隠れる（以上第二類）

四音節動詞のアクセント型は中二高型一型である。活用形のアクセントも、アツメタ・アツメン、アラワシタ・アラワサンのように、すべて中二高型をとる。

Ⅲ　形容詞のアクセント

1　二音節形容詞

「無い」「良い」の二語はいずれも頭高型（○○）である。ただし日常会話では「良い」はほとんど聞かれず、もっぱら「エー」である。

2　三音節形容詞

赤い・浅い・厚い・甘い・荒い・薄い・遅い・重い・堅い・軽い・暗い・遠い※1・丸い（以上第一類）青い・暑い・辛（から）い・清い・黒い・寒い・白い・狭い・高い・近い・強い・長い・早い・低い・広い・深い・太い・古い・細い・安い・若い・悪い（以上第二類）　※1　トイー

三音節動詞と同じように、中高型（○○○）一型である。

3　四音節形容詞

危うい・尊い※1・空しい・宜しい（以上第一類）卑しい・詳（くわ）しい・親しい・涼しい・正しい・久しい・等しい（以上第二類）　※1　トートイ

中二高型（○○○○）一型で、四音節動詞と同じである。なお、五音節形容詞については、上述のような意図的調査は行なわなかったが、たまたま聞いたイソガシー、ヤカマシーなどはすべて中二高

型であった。

Ⅳ　見島方言語アクセントの特色

見島方言の語アクセントには二つの特色が見られる。一つには、語アクセントの型の種類が東京アクセントと同じである場合も、その所属語からすると、むしろ京阪アクセントに近いという状態である。二つには、同時に、アクセントの型の種類の単純化が今日も進められつつあるという状態である。第一の特色は「見島方言語アクセントの古態」と考えてよいものと思うが、この特色は主として一音節名詞と二音節の名詞、動詞にうかがわれる。また、三音節名詞の中にも、古態を示す語詞があることは、先に述べた。第二の特色は「新化の傾向」と認められる。二音節の形容詞、三、四音節の動詞・形容詞はそれぞれ一型である。名詞の場合も、三音節以上の語には、一型化の傾向はかなり優勢である。

ところで、古態を残している一、二音節語も、新化の波に洗われているのであって、それは「アクセントのゆれ」という現象を起している。中学生は、「おとなはカミ（紙）とかコト（事）と言うが、私たちはカミ、コトだ。」などとも言った。また、「今はカウ（買う）と言うけれど、中学のころはカウと言っていた。」と説明する青年もいた。これらは、現在、新化が進んでいることを語っている。古態を残すことは〃宇津〃と本村の〃村〃地区により根強く、新化の傾向は〃浦〃地区により著しい。〃浦〃は他の地区より島外との交渉の多い地であることを思うと、新化には他方言のアクセントの影響もあるかもしれない。

おわりに

東京アクセント域と言われている山口県にも、一孤島にはこのような語アクセントの状態が見られることは興味深い。中央から遠く離れた地のアクセントには、古い要素と新しい要素が共存すると言われるが、見島の場合は、どんな事情によって現在のような実態がもたらされたのであろうか。事実の観察をさらに深めた後にこの問題も考えてみたい。

語アクセント調査の方法については、四二年八月、伯方島語アクセント調査において、藤原先生のご指導をいただきました。厚くお礼申上げます。また見島方言の調査に際しては、土地の方々の心からのご協力をいただき、深く感謝致しております。

（一九七〇・九・三〇）